

淡輪元朔

北海奥州日記抄について

田名部 貞宣

江戸時代における中央人士の津堅紀行については、菅江眞澄の「眞澄遊覽記」、古河古松軒の「東遊雜記」、吉田松蔭の「東北遊日記」等の著名な紀行文が世に知られているが、ここに恐らく当地方には未だ広く知られていないと思われる史料として標題に掲げたものを紹介したいと思う。

筆者がこの史料の存在を知り得た動機は、昨年九月大阪府枚方市香里園松風荘在住の羽倉敬尚氏より淡輪日記全文図訳の意図のもとに同日記の津堅の部分中に現われて来る人物について照会を受け調査の上回答したことに始まる。その後同氏に乞うて津堅紀行の部分を筆写の上送付して貰った次第である。尚羽倉氏は国学の四大人の一人荷田春澗の後裔に當つてをり医史学会同人で既に数回同学会関西支部にて研究発表をしているとのことである。

紀行文の筆者淡輪<sup>フシウ</sup>元朔は大阪住にて筑後柳川藩藏屋敷勤めの標医であり寛政年間北海道並びに奥州の医学修業行脚を試みたもので同じく柳川藩医にて大阪住兩業の淡輪元潜<sup>ネン</sup>一名は童弼号<sup>ネン</sup>額山一の女婿且養子に當る。この養父元潜が又壮年時代医学修業のため東北を巡行して北海道に渡つてをり元朔はこの養父の足跡を踏んだものであるが元潜の紀行は未だ発見されていなし由である。念のため附加えておくが元潜の女は大阪懷徳書院學主中井竹山の長子曾弘の妻となつてをり、元潜は文化五年八十才にて歿し、元朔は文政四年五十九才にて歿し津堅紀行当時の寛政三年は二十九才に當る訳である。

(寛政三年七月)十三日

雨 平明而覺、舟未至青森五里日、蓬田無風、帆委

鼓櫓而進。晨食味復。未下刻至香茶、宿竹野屋。主人出廣穎氏書與余、并源吉、使人三馬屋。余作遺厚註四。谷氏、有川氏之書記付之、又作宏穎氏之報、託主人遺之。

十四日

晴。西風運涼覺秋。已牌。木村見仲來談醫事。午後熱甚。夜道遂于巷中。觀兒女於鬼利者。大異京棋之。同、詣歐訪明神而還。

十五日

雨甚以政不覺。終日無事。飲酒飯覆。請主人借書。得香台文集而讀之。

十六日

尚雨。不得向弘前。祈晴附屋。飯覆。日午而覺。主人供酒肉。与井惟親俱飲。午後雨初晴。揖師德之助采。遺錢。主人請歲處之系。掛囊中恐有。主人出劍視余。檢之盜減而不可知。唯知尤物者。

十七日、雨晴

辰下牌。絕青系。指雨而行。路甚平行。二里許而登山。路甚不峻。行少許。荒渺平岡。望岩城山。二里許。得一松下茅屋。有酒有茶喫。午至浪岡。而舍行厨。地稍平。未至弘前一里。有川以舟而渡。薄暮至

荒街宿廣穎氏

十八日、雨

尚密

祭彈司、野登、工民助、小万砂系、伊春益亦未、談

醫夏、入夜而散、困疲甚已寢、

十九日、雨、或晴或陰

有一士采、語甚不偉、自朝至夕、余倦坐愈甚、告早

暮不去、余起而燈已而去、暮前、与道節出而如、觀

旋岩城川、青田百里、大異於松前、歸路至城而跳馬

鳴而歸、有北國註五太本系、談醫術、多奇怪說

廿日、晴

与主人道節見賊墓、弘大而壯、至豪商三國谷而食、

請予詩、寫詩二首而贈、訪山崎先生、先生耳順鬚髮

、言行溫順、好古而愛詞章、請看詩文稿、以亡天不

得見為憾、歸途訪伊春益、北岡生、手處生米、主人

供酒肉、入夜而歸、

廿一日、晴

主人出眼察書視、余請寫之、見番士真氏病、風濕也

口撥除痰之方法、原了平大助系

廿二日、晴

余告西歸、主人懇留不許、強免、道節兄弟、門人果

送至石川村、出行厨鑊、乃辟、有瘠士、適采在席、  
瓶和哥一首贈余、既而西行、日晡、至阿倍、泊山田  
屋久兵工處。

註一、「竹野屋」兵町所在の船岡屋

註二、「廣頼氏」廣瀬道節正意のこと。後に弘前着

後新所の廣頼宅に宿泊せる記事あり。道節は寛  
政六年六月表医看より御近習医看格となり同年  
十二月學校「臣」御用意被仰付、寛政十二年五月  
十九日歿。

註三、「井原吾」後に出る井原親と同人にて北海道

よりの同行人（羽倉註）

註四、「厚谷氏有川氏」北海道松前での知人（羽倉註）

註五、「木村見仲」未詳

註六、「茶肆可」奈茂岡澤司の略、山崎爾洲の門人

註七、「野登」野呂登の略、同じく爾洲の門人にて

後に藩学種古館の小可となる。

註八、「工民助」工藤民助の略、号鏡文字徳郷、爾

洲の門人にて後圣学字頭に擢でらる。文化四年  
五月長柄奉行として東蝦夷地派遣、傷寒に罹り  
同年十月帰国後病死す。「西郭先生遺稿」なる

遺文集あり。

註九、「小万砂」未詳

註十、「伊巻益」伊東巻益の略、表医看、寛政の頃

医学頭取となる。山崎爾洲の門人

註十一、「北岡太本」太本の伝は「津堅藩旧記伝類  
」に詳し。

註十二、「三國谷」東長町所在の呉服商

註十三、「山崎先生」山崎爾洲（道冲）のこと。爾

洲の伝は「津堅藩旧記伝類」及び門人島西清俊述  
の「爾洲先生行状」に詳し。

註十四、「手塚生」手塚玄策のこと、号徳草（或は  
東漢）儒医手塚玄通の子、後表医看となる。

以上の如くであつて、当時の津堅藩における儒医の  
動靜を知り得て興味ある史料であるが、日記中に現  
われる人物については未だ調査の行届かない点もあ  
り各伝にそれぞれ繁簡があり今後識者の御示教に  
まらたい、尚註の体裁に当っては松野武雄氏の示唆  
に賛う所が少くない。

特に説して謝意を表する。